

令和3年度 第1回 北海道総合開発委員会 議事録

日時：令和3年9月1日（水）14：30～16：15

場所：Web会議（事務局：道庁本庁舎 3階 テレビ会議室）

○出席者

（委員） 寶金委員長、串田副委員長、加藤委員、小林委員、佐藤（誠）委員、佐藤（太）委員、杉山委員、高橋委員、武野委員、松家委員、森崎委員、山下委員、山本委員（計画部会長）
13名出席

（北海道） 鈴木知事、浦本副知事、濱坂総合政策部長、上田計画局長、川村計画推進課長

（上田計画局長）

それでは定刻になりましたので、ただ今から、令和3年度第1回北海道総合開発委員会を開会いたします。本日の進行を務めます総合政策部計画局の上田でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日の会議は、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえまして、Web形式により開催させていただいております。それでは、はじめに開会に当たりまして、鈴木知事からご挨拶を申し上げます。

（鈴木知事）

北海道総合開発委員会の開会に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

まず、寶金委員長をはじめ、委員の皆様には、たいへんお忙しい中、お時間をいただきまして、ご出席いただいたことに心から感謝を申し上げます。また、日ごろから新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止への取組、現在、緊急事態宣言ということで、本日もオンライン会議ということでご協力いただいていることにも、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

本年2月に本委員会に諮問させていただきました「総合計画の見直し」についてでございますが、委員の皆様には、非常にお忙しい中、本委員会、そして計画部会におきまして、様々な大変貴重なご意見をいただいたところでございます。これまでの皆様の真摯なご議論に対しまして、心から感謝を申し上げます。

今、私たちは、人口減少や高齢化が急速に進展する中で、最重要課題であります新型コロナウイルス感染症への対応はもちろんのことといたしまして、気候変動の影響による集中豪雨など、災害に対する脆弱性の克服、さらには、デジタル化、脱炭素化といった社会変革の動きにも、しっかり対応していくこと、こういうことが求められているところでございます。

こうした中、食や観光など世界に誇る北海道の価値を更に磨き上げますとともに、広域分散の地域構造といった、これまでハンディと見なされてきた本道の特性を、コロナ禍を契機として、新たな価値に変えていく、こういったことなど、将来にわたって、誰もが安全で安心して心豊かに住み続けることができる地域社会の実現に向けて、北海道の総力を結集し、様々な取組に挑戦をしていかなければならないと考えております。このたび見直す総合計画は、その「道しるべ」となるものでございます。委員の皆様には、会議におきまして、忌憚のないご意見、ご提言をお願い申し上げます。

最後になりますけれども、このたび見直す総合計画のもとで、「輝きつづける北海道」の実現に向けた歩みを加速するべく、委員の皆様、そして道民の皆様と一体となって取組を進めてまいりたいと考えておりますので、改めて皆様のご理解とご協力を心からお願い申し上げます。

（上田計画局長）

大変恐縮でございます。鈴木知事はこの後、別の用務がございますので、ここで退席させていただきます。

(知事退席)

(上田計画局長)

本日の会議の出席状況についてでございますけれども、委員定数14名のうち、過半数を超える13名が出席いただいておりますので、北海道総合開発委員会条例施行規則第4条第1項に基づきまして、本委員会が成立していることをご報告申し上げます。

続きまして、新任の委員をご紹介させていただきたいと思っております。長瀬清様の退任に伴いまして、新たに、北海道医師会会長の松家治道様にご就任をいただきました。松家様、一言ご挨拶を頂戴できればと存じます。

(松家委員)

8月1日から北海道医師会会長を拝命させていただきました松家と申します。この会議は初めてですので、じっくり拝聴させていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

(上田計画局長)

松家様、ありがとうございます。

本日の会議でございますけれども、報道関係者を含めまして、公開での開催とさせていただいております。また、議事録につきましては、後日、道庁ホームページで、発言者のお名前入りで公開をさせていただきます。

次に、本日の会議資料につきましては、事前にお送りしておりますけれども、会議次第、出席者名簿の他に、次第の下に記載しております資料1から5、参考資料1から5とそれぞれなっておりますので、適宜ご参照いただければと存じます。

途中で音声が聞こえなくなったなど、通信環境にトラブルが生じた場合には、挙手にてご発言いただくなどして、お知らせいただければと存じます。トラブルの状況によりましては、事務局の判断によりまして、一時会議の進行を中断させていただく場合がございますので、ご承知おきいただければと存じます。また、本日、佐藤太紀委員は、ご都合によりまして途中退席されるというふうに伺っておりますので、あらかじめ皆様にもお知らせさせていただきたいと思っております。

それでは、ここからの進行は、寶金委員長にお願いさせていただきたいと思っております。寶金委員長、よろしく願いいたします。

(寶金委員長)

ありがとうございます。それでは、よろしく願いいたします。今日は、所要時間といたしまして約2時間、従って16時30分までを予定しておりますので、よろしく願いいたします。

本日の審議事項は、次第でございますように3つございます。議題(1)「北海道総合計画【2021改訂版・案】について」、議題(2)「北海道総合計画の推進状況について」、議題(3)「その他」の3点です。よろしく願いいたします。

それではまず議事の一番目、「北海道総合計画【2021改訂版・案】」に関して、事務局の方から説明をお願いいたします。

議題(1)「北海道総合計画【2021改訂版・案】について」

(事務局・川村計画推進課長)

事務局の計画推進課長の川村です。よろしく願いいたします。

はじめに、資料1「北海道総合計画の見直しについて」、こちらをご覧願います。こちらは、これまでの検討経過を整理したものであります。「1.経過」でございますが、本年2月の総合開発委員会においてご議論いただきました、「総合計画の見直しの方向性」につきまして、3月に道として決定した後、企業・団体・NPOへの意向調査、道民意向調査を実施するとともに、計画部会での2回の議論を経て、6月に素案を取りまとめたところでございます。その後、素案

の内容につきまして、市町村意見照会、パブリックコメントを実施いたしますとともに、計画部会でのご議論を重ねていただき、本日、先に開催されました第4回計画部会においてご了承いただきまして、総合計画の改訂案をお示しさせていただいているところでございます。これまでに実施いたしました意向調査等の結果につきましては、参考資料1から5として添付してございますが、本日はその概要について、簡潔にご説明いたします。

参考資料3「道民意向調査、企業・団体・NPO意向調査の結果」をご覧ください。左側が道民調査の結果、右側が企業等の調査結果となっております、有効回答率は道民が52.8%、企業等が40.6%となっております。

設問といたしましては、7つの将来像の実現に向けて力を入れるべき施策や中期的な推進方向における今後推進すべき項目のほか、新型コロナウイルスによる生活や働き方への影響についてお聞きしたところです。

回答の傾向といたしましては、共通の設問については、道民・企業等の皆様ともに同じ回答を選択しているケースがかなり多く見られたところでありまして、めざす方向性につきましては、企業も道民の皆様も同じ方向を見ていることが判明したところです。

続きまして、参考資料4「市町村意向調査結果一覧」をご覧ください。こちらは道内全市町村を対象に意見照会を行った結果でございます、7つの市と町から10の意見を頂戴いたしました。主な内容といたしましては、文言の修正、あるいは指標の数値の修正などを中心にご意見をいただいたところでございます。

参考資料5「北海道総合計画【2021改訂版】（素案）についての意見募集結果」、こちらをご覧ください。こちらはいわゆるパブリックコメントでございます、3人・2団体から計画全般にわたって合計21件のご意見をいただいたところでございまして、そのうち7つの意見を踏まえ、計画の一部を修正してございます。調査結果等の概要につきましては以上でございますが、詳細については後ほどご参照をお願いいたします。

それでは次に、改訂案の内容につきまして、資料2「北海道総合計画【2021改訂版・案】」によりまして、主な改正点をご説明させていただきます。

まず、第1章「総合計画の考え方」についてでございますが、4ページをご覧ください。中段にあります「＜持続可能な開発目標(SDGs)の達成に向けた施策の推進＞」でございますが、この度の改訂に当たりまして、SDGsの理念と合致する政策を推進していくことを明記しますとともに、新たな指標として、「SDGsの達成に向けて取組を推進している自治体割合」を追加したところでございます。

次に9ページ、第2章「北海道のめざす姿」でございますが、こちらでは、本道を取り巻く社会経済情勢の変化をまとめてございます。新たな項目としまして、14ページにあります、「未来技術の活用」といたしまして、デジタル化の推進について追記しますとともに、18ページにおきましては、「新型コロナウイルス感染症の影響による社会の変化」を新たに記述したところでございます。

21ページ以降につきましては、総合計画のめざす姿と7つの将来像を記述してございます。

「輝きつづける北海道」というめざす姿は、四半世紀先を見据えた将来展望でございまして、新型コロナウイルスによって揺らぐものではない、という考え方の下、このパートについては基本的には変更しておりません。

33ページ、第3章「中期的な推進方向」についてでございます。こちらについては、今回新たな章として追加したものとなります。新型コロナウイルスの感染拡大が道民の生活や経済などに大きな影響を及ぼしたこと、またその一方で、北海道のハンディとされていた広域分散型の地域特性が「密」を避けるという点から新たな価値として再認識されていること、更に、脱炭素化やデジタル・トランスフォーメーションといった社会変革の動きに的確に対応するため、今後の政策展開を図る上で重視すべき視点としまして、「危機に対する強靱な社会を構築」、「北海道の真価の発揮」、「社会の変革への挑戦」の3つを掲げております。

37ページ、第4章「政策展開の基本方向」では、その3つの視点に基づいて、政策の柱や方向性をまとめてございます。37ページ及び38ページで全体の体系を示しまして、39ページ

以降に詳細を記載しております。40ページの下段をご覧いただきたいと思いますが、今回の見直しでは、政策の柱ごとに、関係するSDGsのゴールを明記することとしております。

次に主要な政策につきまして、ご説明いたします。

45ページ、「(4) 環境負荷を最小限に抑えた持続可能な社会の構築」をご覧いただけます。「ゼロカーボン北海道」の実現に向けまして、「多様な主体の協働による社会システムの脱炭素化」、「森林等の二酸化炭素吸収源の確保」といった政策を推進していくことなどを明記いたしました。

次に51ページ、「(7) 強靱な北海道づくりとバックアップ機能の発揮」をご覧いただけます。北海道の強靱化に関して、先の胆振東部地震の教訓を踏まえ、一番下の○としまして、「災害時におけるエネルギーの確保のため、電力基盤整備の推進とともに、国や電力・石油供給事業者等との連携の強化」を追加しております。

また、52ページでは、「感染症に強い強靱な社会の構築」としまして、「検査体制や医療提供体制の強化、保健所機能の再構築」、「テレワークの導入、遠隔医療、オンライン学習の推進」などを図っていくことを明記しました。

53ページ、「(1) 農林水産業の持続的な成長」をご覧いただけます。一次産業のデジタル化の流れを踏まえまして、スマート農業の加速化、ICTを利用した漁場の効果的管理や林業イノベーションの推進を追記したほか、脱炭素や食の安全・安心の観点から、クリーン農業・有機農業の推進を図ることとしております。

63ページ、「(6) 道民をはじめ国内、そして世界中から愛される『観光立国北海道』の実現」をご覧いただけます。「観光立国北海道の再構築」といたしまして、「感染症対策などに配慮した受入体制の確立」、「道民からも愛される観光地づくりを推進」とともに、64ページにありますように、「アドベンチャートラベル・ワールドサミット・バーチャル北海道／日本」の開催を契機としまして、体験型観光やワーケーション等の滞在型観光の推進を図ることとしました。

67ページ、「(1) 協働によるまちづくりの推進や地域コミュニティの再構築」をご覧いただけます。68ページにありますように、北海道のポテンシャルを活かした移住・交流の促進といたしまして、「関係人口の創出・拡大」、「幅広い年代層に対する移住・定住の促進」などの取組を進めることとしました。

73ページ、「(4) ふるさとの歴史・文化の発信の継承」をご覧いただけます。先の7月に決定いたしました北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録の効果を地域の賑わいの創出につなげる取組を推進することを明記いたしました。

79ページ、「(7) 持続可能な社会・経済を支える社会資本の整備」をご覧いただけます。総合的な交通ネットワークの形成に向けまして、80ページが一番下の○にありますように、交通インフラ整備と自動運転やMa a Sとの連動のほか、運輸連合に向けた検討を進めることを明記しております。

また81ページでは、「地域の可能性を広げるデジタル・トランスフォーメーションの推進」としまして、一つ目の○にありますように、「医療、教育、防災や産業など様々な分野におけるデジタル化の推進」を図るとともに、二つ目の○にありますように、「デジタル技術を理解し、利活用できる人材や専門的で質の高いデジタル人材の育成・確保」などを図っていくこととしました。

83ページ、第5章「地域づくりの基本方向」では、総合計画が掲げる6つの連携地域であります道央・道南・道北・オホーツク・十勝・釧路根室における「地域づくりの方向」と、連携地域を構成します14振興局地域の「重点的な施策の方向」について、デジタル化や脱炭素化の流れを踏まえた今後の方向性を記載しております。

93ページ、第6章「計画の推進」についてでございますが、96ページにございます図をご覧いただけます。総合計画は、道の政策の基本的な方向を総合的に示すものでありますので、個別具体的な施策・事業につきましては、別に策定する計画に委ねることとしてございまして、中でも、特に重点的・分野横断的に推進する計画を「重点戦略計画」に位置づけてございます。「重点戦

略計画」には、これまで「北海道創生総合戦略」及び「北海道強靱化計画」を位置づけていたところでございますが、今回、デジタル化とゼロカーボン北海道の実現に向けまして、「北海道 Society5.0 推進計画」及び「北海道地球温暖化対策推進計画」を新たに位置づけることとしたところでございます。案の説明につきましては、以上でございます。

それでは資料1の方にお戻りいただきたいと思っております。下段でございます「3. 今後の予定」でございますが、ただいま御説明申し上げました総合計画の改訂案の内容につきまして、委員会のご了承をいただけましたら、知事に答申いただいた後、10月を目途に、総合計画の改訂を決定してまいる考えでございます。説明は以上です。

(寶金委員長)

はい、ありがとうございます。続きまして、山本計画部会長の方から、計画部会におけますこれまでの審議経過につきまして、ご報告をお願いいたします。

(山本委員(計画部会長))

私から、計画部会における審議の経過につきまして、ご報告させていただきます。

資料1にあるとおりでございますが、本年5月から本日までの間に、部会を4回開催いたしました。新型コロナウイルス感染症が道民の皆様の生活や経済にいろいろな影響を及ぼしてまいりまして、それを改めて確認した上で、道が今後展開すべき政策の基本方向につきまして、議論を重ねてきたところでございます。

先ほど道から説明のあった資料2の計画案は、部会の委員から出された意見を概ね反映した形で取りまとめられたものであると捉えております。部会において特に議論、実際の部会の中で議論になった点と、それに対する対応について、報告とご意見を申し上げさせていただきます。

まず、計画案の64ページの観光政策に関しまして、一つ議論がございました。「IRコンセプトの構築について検討を進める」とする事務局案がありまして、これについて、委員の間で賛否が分かれたということがございました。

事務局案への反対の理由としては、「道民の間で賛否の分かれるものを総合計画に掲載すべきではない」というものでございました。賛成、事務局案でよろしいとした理由としては、IRの是非の問題ではなく、「検討を進める」こと自体は問題がないのではないかと、という意見でございました。実際に、議論の場で皆様にご意見を伺ったところ、賛成が多数ということですから、それを除きましてご意見を反映いたしまして、IRについては事務局案を一部修正しまして、最終的に、64ページにありますように、以下のような表現になったところでございます。「感染症対策や施設機能、効果、懸念される社会的影響への対策等を示した北海道らしいIRコンセプトを構築するなど、新たなインバウンド等の取込方策の一つとして検討を進める」との表現にしたところでございます。そういった案で、今回ご提示させていただいております。

また、全体の話ですけれども、計画全体を通しまして、総合計画のめざす姿の実現には、道民の理解と協力が不可欠であるということから、計画自体をわかりやすいものにするとともに、計画の内容を道民にわかりやすく伝える工夫が必要であるといったご意見がございました。

また、総合計画というのは言うなれば道民へのメッセージであり、メッセージ性を高めるということが重要である。そういった趣旨のご意見を部会の中の議論でたくさんいただきました。本日の案は、こういった部会の意見を反映させていただきまして、挿絵を入れるとか、また、巻末の用語解説を充実させるなど、いろいろな工夫を施しているところでございます。さらに、計画部会として、この度の総合計画の見直しに込めた思いというものがありまして、これをメッセージの形にして、本日、資料3として添付させていただいておりますので、ご確認いただければと思います。

このメッセージの概要でございますけれども、総合計画を未来への“かけ橋”のグランドデザインに見立てまして、私たち道民は、そこに“かけ橋”を築きながら、対岸の「輝きつづける北海道」に向かって歩みを進めていた。そういう全体の構造になっております。

ところが今、新型コロナウイルス感染症という「激流」が来ておりまして、輝きつづける明る

い未来への到達が危ぶまれるという事態にあるということでございます。それで、今回、計画を見直して「強靱な社会の構築」、「真価の発揮」、「変革への挑戦」という3本の「支柱」を足しまして、“かけ橋”を補強する設計図を書いた、という構造になってございます。それがメッセージでございます。

その上で、“かけ橋”の完成は、行政のみではなし得ないわけございまして、企業や団体、それから道民の皆様のご知恵と力の結集が不可欠であることから、全ての道民が連携・協働して、未来への“かけ橋”を築いていきましょう、とそういったかたちで締めくくるメッセージとなっております。これは部会からの提案でございますけれども、もし委員会としてご了承いただけるのでありましたら、ぜひ、委員長から知事にこのメッセージをお渡しするよう取り計らっていただきたいと考えているところでございます。

それから最後に、この委員会でもそうですし、部会でもそうですが、総合計画を絵に描いた餅にしないということが大事でございます。そのためには、総合計画の内容について、道民の理解を深めていただくことが不可欠でございます。北海道におきましては、今回の見直しの内容につきまして、多くの方々に広く周知していただきますよう、お願いしたいと考えております。

私からは部会の審議経過と報告の内容についてご説明させていただきました。以上でございます。

（資金委員長）

ありがとうございます。山本部会長、高橋副部長をはじめまして、計画部会の皆様、本当にご多忙の中、またこのコロナ禍の中で、非常に熱心に、4回にわたりましてご審議いただきまして本当にありがとうございます。

それでは、今回がまとめとなります総合計画の見直し（案）に関する議論としては、今回が最後となりますので、是非皆様からご意見をいただきたいと存じます。時間の都合もございまして、目途ですけれども、お一人3分ぐらいという形で意見をいただきたいと思っております。私の手元にある出席者名簿に従ってご指名しますので、どうか一言、二言、ご意見をよろしく願います。それでは、加藤敏彦委員、よろしく願います。

（加藤委員）

まず非常にこの短い間に見直し案を作成していただいた計画部会の各委員の皆様方と、事務局に改めて敬意を表します。

私の方から若干希望を述べさせていただきたいと思っております。まず1点目ですけれども、この計画というのは、2016年から2025年までの10年間を基本として、今現在、残り4年半というふうになっております。折り返しを過ぎたところでございますけれども、この時期において、見直しを行ったということが、さらにその次の10年間、次の10年を見据えた計画における出発点、もしくはこの考え方を基に持ってスタートしていくということになっていただきたいということを、まずは希望として述べさせていただきたいと思っております。

というのは、次の10年というのはいわゆる2035年を問題とする団塊の世代が後期高齢者に突入し、他の世代を含め、総人口の3分の1が高齢者になるという、超高齢化社会に向かっていく10年であります。この10年に向かって、今から準備をして、そしてその10年後が「輝く北海道」であるために、今の計画の見直しをしながら、次の計画につなげていっていただきたい。そういった意味で、この計画が非常に意義のあることではないかなと考えております。

私としては、福祉の観点から1点申し上げたいと思っております。ひとつは第4章の政策展開の基本方向で記載しております大項目の「生活・安心」の分野についてであります。参考資料の道民意向調査を見ていきますと、コロナ禍の影響もあったかと思っておりますが、安心の医療・介護体制に力を入れるべきと答えた方が非常に多かったというのがわかります。特にその内訳を見ていきますと、若い年代18歳から29歳の年代と、70歳以上の人が同じように高い割合を示したということに、私としては非常に興味を示したところであります。

これは若い世代に取って、今後の人口減少と超高齢化社会における、その時代においては医療

介護への期待、現在における不安、そういったものの現れがこの数字に出たのではないかなというふうに考えております。従いましてこの政策の方向性として示されている計画を推進していくためには、先ほど計画部会長の方からもいろいろなお話がありましたけれども、私としては一つこの実行のために、ある意味キーワードとして、「合意」というキーワードが必要ではないかなというふうに考えております。それは若い人と高齢者、働く世代と年金受給世代、都市部の人と過疎地域の人、いわゆるこの人口減少と超高齢化社会において、対立が予想されるような人たち、もしくは地域、こういったところに対してどのように政策を動かしていくか、限られた資源を有効に分配していくためには、高齢者のため、子育て世代のため、都市部のため、過疎地域のためというような、二者択一的な選択ではなく、やはりある意味、皆さんが合理的、そして客観的な説明により、多くの方が納得できる、そういうような政策、合意の政策を進めていただきたいと、このように考えております。

最後になりますけれども、若干細かい話で申し訳ないですけれども、コロナ禍の影響で昨年から1年間にかけて、福祉サービスの提供主体というのが、過疎地域において著しく減少してきております。計画案の中で、41ページのところで、遠隔医療による支援というような言葉が記載されておりますけれども、医療・福祉サービスの提供は、最後は人でございます。この人をどのように手当して、過疎地域における医療・介護をきちんと行っていくか、この2035年に向けての今からの議論、今からの考え方の構築を始めていただければなというふうに希望しております。以上です。

(寶金委員長)

はい、加藤委員、大変素晴らしいご意見ありがとうございます。また最後に少しディスカッションしたいと思います。続きまして串田雅樹委員、お願いいたします。

(串田副委員長)

串田です。よろしくお願いいたします。

今回の総合計画案については2025年に向けた内容ということですが、短い期間の中でこのような形にまとめていただき、大変ありがとうございます。

原案については概ね了承と、私も考えております。その中で、今、加藤委員もおっしゃった2025年以降につなげた話として、私からも1点、今後に向けた取り組みについて述べさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

私は、JAグループ北海道の代表としてこの委員会に参加させていただいております。皆様もご存知のとおり、北海道の役割、食糧基地としての役割を担っているという自負を持っている中で、現在、組合員の方も一生懸命、農畜産物の生産に当たっていただいております。その中で、これまで10年スパンで考えられていたものが3年のスパンで世の中が動き出しており、世の中の動向が非常に進んでいるということで、1点、物流に関し意見を申し上げたいと思います。

先ほど申し上げましたとおり、食糧基地として、今現在も今後におきましても日本国民の皆さんに対しまして、食糧の供給ということをしっかりと責任を持って取り組んでまいりたいと思っておりますが、今現在、北海道新幹線の方も延伸が決定し、札幌まで工事が始まっております。インフラ整備に関して、新幹線の整備に対しては、非常に私どもも期待をしているわけですが、今現在、非常に多くの北海道の畜産物、農産物が概ねJR貨物によって在来線を使い、大消費地であります本州方面に送られており、今後新幹線が整備されるに伴い、在来線の存続ということが農業者にとっては非常に懸念しているところでございます。特に長万部、五稜郭の間につきましては、北海道における物流の大動脈ということで、新幹線の開業によってこの在来線が断絶してしまうことによる貨物の方の動きを非常に懸念しております。現在、道路的にはトラック物流もありますが、今後のドライバー不足というのは既に懸念されているところであり、輸送量的にはトラックに変えられないということがデータの的にはあるわけであり、

今後に向けましては、JRの問題だけでなく、生産者、私たちだけの問題でもないということで、北海道の役割としてこのような物流問題に対し最大限の課題として取り組んでいただいた

中で、インフラ整備、そして観光など様々な分野での北海道の今後の未来について総合的に判断をして進めていかなければいけないと考えます。

改めて、今回の総合計画案に対しては、概ね了承ですが、物流に対しましても今まで以上の取り組みをぜひ、道としても取り組んでいただくような行動のもと計画を進めていただきたく、私からは物流に関し、1点意見として、今後を期待しながら発言させていただきました。以上です。

(寶金委員長)

串田委員、ありがとうございます。これも、別の視点から大変貴重な御意見だったと思います。続きまして、小林良輔委員、お願いいたします。

(小林委員)

北海道経済連合会の小林でございます。私の方からは、経済界の観点から発言させていただきたいと思っております。

まず、北海道はご案内のとおり、新型コロナウイルスの感染拡大が国内の他の地域よりも1ヶ月早く始まり、その影響がもっとも長期化している地域であります。これまで道内経済を牽引してきた観光と食を中心に幅広い業種で、かつて経験したことのない影響を受け、未だその出口が見えない状況にあります。現在、国及び北海道、あるいは地方自治体による様々な経済支援策が実施されており、早期の経済回復や事業の継続、あるいは雇用継続に向けた切れ目のない対策に期待しているところであります。

また、北海道は人口減少・少子高齢化、全国より10年も早いスピードで進展し、労働力、後継者不足の一層の深刻化や、それに伴っての経済の大幅な縮小といった課題を抱えております。道内経済を持続的に発展につなげていくためには、道外・海外に向けて「稼ぐ力」を高めることを目指した取組が不可欠でございます。コロナ禍によって北海道の食と観光の強み、魅力が失われた訳ではなく、今後も北海道を強く牽引する産業に変わりがないものと考えております。引き続き、世界があこがれる観光立国北海道の推進や、国の食糧供給基地としての役割を担い、食の移輸出拡大に取り組んでいかなければなりませんし、食の供給を支える道内の物流網の維持ですとか、道外への物流コストの削減、あるいは効率化に取り組んでいかなければならないと考えております。

更にコロナ禍で顕在化した密から疎、東京一極集中の是正の動きが活発化するとともに、新たな日常への変容やデジタル化への加速、ゼロカーボン北海道といった脱炭素への挑戦など、大きな社会変化の動きも急となってきております。こうした情勢変化によって自然豊かで開放的な恵まれた疎を持ち、再生エネルギーの賦存量が豊富な北海道には、企業や人、あるいは事業を呼び込む絶好な機会が訪れております。既に活発に動いている国内他地域との競争に打ち勝ち、北海道を選択してもらえるよう、地域の魅力づくりや、実効性のあるPRを早急に、かつ強力に推し進めていかなければならないと考えております。

加えまして、道内の経済、産業活動を支え、産業からの復旧・復興面でも重要な役割を持ちながら、他地域に比べ、見劣りする社会資本整備・強靱化についても計画的に進めていく必要があります。

現在、北海道総合計画改訂版を策定しているところですが、今後は、オール北海道でこの計画を確実に推進していくことで、北海道の「稼ぐ力」をより一層高め、北海道の諸課題を克服し、持続的発展につなげていくことが肝要かと思っております。この計画の達成により、北海道の未来、社会に明るく輝き続けるよう経済界としても、従来に増して、尽力してまいりたいと思っております。以上でございます。

(寶金委員長)

小林委員、ありがとうございました。続きまして佐藤誠之委員、お願いいたします。

(佐藤(誠)委員)

北海道観光振興機構の佐藤です。

北海道総合計画【2021 改訂版・案】の63ページと66ページに北海道の観光につきまして記述がございます。当機構は本年6月に、観光庁の事業で2020年度における北海道内の総観光消費額の調査を実施いたしました。マスコミにも取り上げていただきましたのでご記憶にある方もいらっしゃるかもしれませんが、2020年度の道内観光消費額の総額は、4,354億円で前年比28.7%です。前年の2019年度は1兆5,159億円ということで、1兆円余り減少し、また、経済波及効果、これは前年が2兆1,910億円でした。2020年度は、6,364億円ということで、1兆5,500億円減少しております。いかに北海道経済、地域経済に打撃があったかということでございます。

私はこの委員会の計画部会の委員も拝命いたしました。改めて、北海道における観光の重要性を認識いたしました。北海道観光振興機構という北海道の観光のお手伝いする組織に身を置いておりますので、個人的には観光産業に40数年身を置き、観光というものは裾野が広く、影響が大きい、北海道においてはリーディング産業だと自分に言い聞かせてまいりましたが、改めてこのコロナでそれを痛感した次第であります。今後も、北海道の観光のために少しでもお手伝いできればと思っております。

また、山本計画部会長がおっしゃっておりました「未来への“かけ橋”に寄せて」という前文が資料3としてご提示されておりますが、これを拝読したときに、すごく温かいものを感じました。こういう「総合計画」というものになると、血が通わないとは言いませんが、なかなか読みにくいものが多いときに、こういう「未来への“かけ橋”に寄せて」という文があるとたいへんいいなと思いましたので、感想を述べさせていただきます。以上でございます。

(寶金委員長)

ありがとうございます。では、佐藤太紀委員、お願いします。

(佐藤(太)委員)

まず、コロナ禍にありまして、これまでの「食と観光」というものに加え、「グリーン」と「デジタル」という2つのキーワードを早速、迅速に的確に取り入れられています。更に非常にわかりやすく、具体的に表現されていると思います。大変なご苦労があったと敬意を表するとともに、特にこの段で手を加えていただく必要はないことを意見として述べさせていただきます。

ただ、これからは「実行」ということになると思うのですが、そこでは次のことに留意していかなければならないと思います。先ほどお話もありました「東京一極集中からの分散」というものと同じように、道内においては「札幌一極集中からの分散」というものもぜひ期待したいと考えているところです。地方においてはやはり目に見える人の数というところに左右されがちなところもあります。人口の大小ではなく「生産空間」という考え方、「地方が持ちうる重要な機能の充実を目指す」という視点を失うことなく実行することが不可欠です。観光にしても食にしてもグリーンにしてもそうです。ぜひこれを念頭に置きながら、この計画を進めていただきたいと思います。

最後に振興局についてです。やはり「地方の声を道庁政策にしっかりと結びつける」というのは地方の実態を把握されている振興局、また総合振興局です。この計画にも「地方自治体や企業との連携」ということはしっかりと謳われていますけれども、そこを地域の実態と乖離したり、間違えたりしないようにしっかりと充実していただきたい。道全体で稼ぐ力というのはもちろん今後も欠かせない重要なポイントですが、今後は世界のトレンドとしてはおそらく行き過ぎた市場経済からの振り返りがややしばらく続くのではないかと予測する研究や報道もあります。また、ある意味では期待しているところでもございまして、今回の総合計画は、そういう意味においても、時代の先を取っていたのかなと思います。いわゆる公の機能の充実という点でなすべきことがしっかりと書かれているということでも、私も一道民としても、委員としても、この計画に従って実行していきたいと思っております。以上でございます。

(寶金委員長)

ありがとうございました。続きまして、杉山元委員、お願いいたします。

(杉山委員)

連合北海道の杉山です。まず、今回お示しいただいた総合計画の改訂版では、リファイン（改訂・改良）にあたり、道民をはじめ、企業、自治体などから様々なご意見をいただくなど丁寧な対応の中で取りまとめられ、よくまとまっているなどと思います。この間の計画部会、事務局の皆様のご尽力に感謝を申し上げます。

あとは「めざす姿」であります「輝きつづける北海道」の実現に向け、産学官金などが連携をし、取り組んでいただくとともに、毎年度、P D C Aサイクルをまわしながらの対応はもとより、先ほど局長も述べられましたように、道民への発信と理解と協力に向けた対応も重要と認識するところであります。その上で、報告を交えて2点ほど述べさせていただきます。

連合北海道としては、北海道生協連さんなどと連携し、「ほっかいどう若者応援プロジェクト」を創設し、一人暮らしの学生を対象に、食料品などの支援をさせていただいております。この取組では、北海道・札幌市からの後援をはじめ、支援を行う大学のある自治体の皆様からも後援をいただいているところであります。2月から始めたこの取組も、7月末までに19大学24キャンパスにおいて、約8,300名に提供をさせていただき、11月以降も支援を計画しているところであります。

この取組は、新型コロナウイルスの影響によりアルバイト収入が減少し、生活や修学が困窮している大学生の支援はもとより、この取組から北海道への好感につながり、若者が地元や道内企業への定着、更には関係人口につながるなど、地方創生への貢献の思いなどからも取り組んでいるところでございます。その意味からも、道内の大学・高専に学ぶ高度人材が地元企業に正規雇用により就職するよう、道として奨学金返還支援制度の創設により、「北海道若者活躍プロジェクト」の道内就職優遇制度の改善に結びつける取組のご検討をお願いするところであります。

もう一点が、カーボンニュートラルの関係であります。この取組については、政府として2050年、温室効果ガスゼロ宣言をし、2030年には46%削減という目標のもと、道としても「ゼロカーボン北海道」の実現に向け、環境と経済・社会が連携し、イノベーションなどを取り入れ、計画・実現していくことは良いことだと思います。

一方、我々働く者の立場として留意していただく点は、雇用も含めた、社会的影響を考慮した「公正な移行」の視点も重要であるという点も認識していただきながら、計画の推進をお願いするところであります。以上申し上げて、私からの意見とさせていただきます。

(寶金委員長)

杉山委員、ありがとうございました。続きまして高橋清委員、お願いいたします。

(高橋委員)

北見工業大学の高橋でございます。今回は山本部長のもと、副会長として計画部会でいろいろと議論させていただきました。大変私も勉強になりましたし、今後の北海道を考える上で貴重な時間をいただいたというふうに思います。今回は、この計画の推進にあたって留意すべき点という形でいくつかお話させていただきたいと思います。

先ほど、どなたか委員のお話がありましたとおり、残りの期間があと4年半という形で、この短い間、どういう形で、実際、実行できるのかということをし少し考えながら、部会に参加させていただきました。その時の軸としては、やはり、危機に対する強靱化も含めて、今すぐに実施すべき政策もありますし、一方、観光や食といったような形で、変わらないもの、更に磨きをかけるもの、また、デジタル・トランスフォーメーションも含めて、すぐ、やらなければいけないとかたちのものもございまして、かといって、人材育成のように、なかなか成果の出てこない、じっくりと時間をかけてやるものというようなかたちの軸があるのではないかなと考えてござい

ます。どちらにしても、残りの4年、更には、次の10年も考えた時に、時間軸を考えながら、この計画、政策を進めていくということが重要であろうというのが第1点でございます。

2点目は、それぞれの政策を実施するにあたっての目標値の達成ということでございます。目標値は確かに量的に示すものとしては良いと思いますけれども、今回の新型コロナに関していくと、やはり、質的なもの、心の豊かさも含めて、そういうものに対する人々の気持ちが集中しているのではないかなと思います。そういうことを考えますと、やはり、指標の達成というのは一側面を示しているものであって、計画を実施するにあたっては、質的な要素も含めてしっかり検討していく必要があるのかなと思います。

このような計画の集合体が総合計画と私は考えてございますので、それを統合化しながら実施していくということが、今後の大きな課題だろうと思います。こういう複数の計画を実行するにあたっては、やはり、競争とか協調とか連帯とか合意というようなこともございましたけれども、そういうキーワードが重要だろうと思いますし、特に、地方において、これを実施するというのが特に重要だと私は考えております。

特に、第5章の地域の計画の進め方、これをもう少し深掘りしながらですね、地域ごとにおける特徴を踏まえた形で実施していくということが大事だと思います。とは言いながら、今回、総合計画を改訂するにあたりまして、目標は、「北海道のライフスタイルの提示」ということだと思います。これは個人だけではなくて、企業のライフスタイルというようなものもあると思います。こういうものが、フラッグを1つ上げるという形で北海道の進むべき道のある程度示すことができたというのが、今回の見直しの大きなポイントだと思います。

更には、このようなことを総合的にわかりやすくメッセージという形で示すこともできたということが、今回、部会としても提示させていただきましたので、ぜひ、これを広く発信していくことが重要だろうと思います。以上でございます。

(寶金委員長)

高橋委員、ありがとうございます。続きまして武野伸二委員、お願いいたします。

(武野委員)

北海道消費者協会の武野です。

計画部会の論議の中で、いろいろ意見を述べさせていただきました。SDGsや食の安全・安心、有機農業の取扱い、高齢者支援、アイヌの人々への配慮、そういった点について反映させていただいて感謝しております。

残念ながら、IR、統合型リゾートについては、ギャンブル依存症に関して道民世論が大きく分かれる問題であり、記述の見送りを強く表明させていただきました。素案の作成に責任を持つ計画部会の委員を職務半ばで辞任せざるを得なかったということは、誠に残念なことで申し訳なく思います。本日、親委員会の委員としては、IRの記述のみ賛成できないことを改めてお伝えさせていただきました。

なお、委員長メッセージの「未来への“かけ橋”に寄せて」は大変わかりやすく、ぜひホームページなどで道民にもお示しいただけるようご配慮をお願いしたいと思います。私からは以上です。

(寶金委員長)

ありがとうございます。続きまして松家治道委員、お願いいたします。

(松家委員)

北海道医師会の松家でございます。初めての参加でよくわからない点はございますが、この北海道総合計画の見直しにあたりましては、皆様の努力に対して、深く敬意を表したいと思っております。医療界ですので、そうした医療面に関して、お話したいと思っております。

内容を拝見させていただきましたけれども、やはり、この計画をいかに実行するか、これが一

番問題かなと思っております。中でも、周産期医療、これは明日の北海道、日本を支える子どもたちを作るために非常に重要な政策だと思っておりますので、これを十分、充実していかなければいけないと思っております。

また、今回のコロナ禍を見まして、やはり、北海道全体を見ますと、保健所機能の脆弱化ですね、それから早期発見につながる検査の脆弱、こういうことがあります。ただ、これはこういったパンデミックがなければ、非常に多く必要なわけではありませんので、やはり、こういう面に関しては、非常時と平時と、分けた計画をきちんと立てなければいけないのではないかと考えています。

例えば、IRもそうですけれども、やはり、ギャンブル依存症、IRの収益のほとんどがカジノだと言われております。やはり、その点についてきっちりと検証して、検討していくということが必要かと思っております。

全体通して、今の状況を考えますと、やはり教育が一番重要ではないかと思っております。思いやりの心を持てる人たちをつくる、「うつす、うつさない」という言葉の意味がわかる子どもたち、これをつくるのが、一番こういうパンデミックに対して重要かと思っておりますので、それらを込みにした計画があったらいいなと思っております。以上です。

(寶金委員長)

松家治道委員、ありがとうございます。続きまして森崎三記子委員、お願いします。

(森崎委員)

計画部会の委員を拝命させていただきました。初めて参加させていただいたんですが、第1回の総合開発委員会の時に女性は一人なんですってという発言から、計画部会に参加させていただいたのではないかという思いもあるのですが、それはそれでチャンスを提供いただいたと思ひまして、先ほどの計画部会でもお話しさせていただきましたが、いわゆる一般人の視点で参加させていただきました。

その中で、どうしても論理的なロジカルな縦の案になっているような気が、今までもずっとしていたものを、もっと柔らかい横の視点もあってもいいんじゃないかということを通して発言させていただいたところです。改めて案を見させていただくと、例えばページをめくる度に、読みやすさがすごく工夫されていたりとか、例えば一番後ろに用語解説がありますけれども、今までもそうだったかもしれませんが、今更人に聞けない用語みたいなものがどんどん最近新しく出てきますので、それをネットで探すよりも早く、国語辞典代わりのようにして使えるとか、道民のためのものであるならば、道民が自ら普段から携帯して持って歩きたいというくらいのものであったら更にいいのかな。

そうすると、本当の意味の参加型の道民の暮らしに近づいてくるんじゃないかなと改めて感じたところです。具体的にかみ砕いて打ち出されているというのがすごく改めて、実現や実行に自らしたくなるような内容のものに更に改訂されたのかなと感じました。

あとは、知らないことをたくさん勉強させていただいたという感触がございます。勉強させていただきながら、思ったことを述べさせていただいたものが割と柔軟に対応していただけるんだなと改めて感じまして、できるならばいろいろな暮らしをしている方が、いわゆる今流行の多様性を持って、こういった委員会等に参加が可能な時代に更になっていただければ、より道民のための本当の意味の計画になっていくのかなと、更に今後の10年を考えたときに。そのような感想を感じているところです。以上です。

(寶金委員長)

ありがとうございます。続きまして山下貴史委員、お願いいたします。

(山下委員)

まず、今回の総合計画の見直しの作業を当たってきました寶金委員長はじめ、関係各位、道庁

の事務局の関係者の皆様、本当に効率よく仕事をされたなという思いが強くありまして、深く敬意を表したいと思っていますところでもあります。今回提示されております、2021改訂版の案というのは、現行の既に走っている北海道総合計画をベースに課題や多様な方向、コンパクトに取りまとめたということかと思いますが、大変バランス良く整理されているなと思ひまして、評価をさせてもらいたい。

修文意見ではありませんが、一点だけコメントさせていただきます。改訂案の中で何カ所か言及されておりますし、また、先ほど留萌の佐藤委員もこの問題について触れられておりましたけれども、人口減少と高齢化、特にその中でも札幌における人口集中の話でございます。17ページに、第2章の北海道のめざす姿の中で触れられております都市部への人口集中、地方の過疎化の進行という部分がございますが、この部分についてであります。現行の計画でも触れられておりますが、現行の計画よりも今回の改訂版については問題点をより鮮明にした上で、それを乗り越える解決策として、道と札幌市の連携ということが強く謳われております。それだけで足りるかどうかはともかく、新しいステージに入ったというか、一歩も二歩も踏み込んで取組姿勢を示していただいたということで強く期待をいたしております。この先、どういうことになるか分かりませんが、我が国全体でも東京一極集中が大きな問題だと認識されております。同様に、ちょっと言い過ぎかもしれませんが北海道においても札幌圏一極集中ということが、オール北海道の発展を考えたときに大きな問題として浮上してくるのではないかと考えております。そういう意味で、従来の考え方を大きく踏み出していただけると、そのことについて重ねて評価を申し上げたいと思ひますし、是非それを踏まえて、北海道において、この点について適切な政策運営にあたっていただきたいと強く期待を申し上げさせてもらひまして、発言したいと思ひます。よろしくお願ひします。

(資金委員長)

ありがとうございます。山本委員、他に何かご追加することはございますか。

(山本委員)

部会長としてではなく、一委員として、若干発言させていただきます。10年計画の残り4年半というタイミングを考えると、デジタル・トランスフォーメーションといいますか、デジタル化の進行が一番の課題です。そのタイムスケールでいうと、これは非常に長い期間といいますか、昔、ドッグイヤー (dog year) という言葉がありましたように、それがますます加速しているという意味で、非常に重要なタイミングだと認識しています。このタイミングで、北海道が社会インフラのデジタル化に乗り遅れないでやっていただきたいということがひとつあります。

あと、今回、コロナ禍での見直しということで、どうしてもコロナばかりが気になってしましますが、その中で出てきた北海道の価値があると思ひます。一つは、首都圏からの距離です。遠いということが今まではハンディだったのだけれども、距離がある故に、首都機能の一部を北海道が代替するとか、そういう可能性もあるわけですが。従来から非常に価値があると思われていたが、なかなか具体化されなかった再生可能エネルギーの問題、それから食料の安定供給も、北海道の価値が出てきている。今まではともすると、北海道に対して何かしてくれ、我々道民が道庁に対して何かしてくれというスタンスのお願ひが多かったのですけれども、私は是非、この機会に、我々が持っているリソースを日本全体のために還元するとか、我々が果たす役割にしっかりと着目して、こういった計画を見ていただきたいと思ひます。日本だけではなく、東南アジアをはじめとする世界に向けても、重要な機能があります。

この「未来への“かけ橋”に寄せて」というメッセージを書いたのですけれども、その中で、豊かな再生可能エネルギー資源、良質な食という言葉が出ていますけれども、私は情報系の人間なので、是非その中に、情報機能における北海道の役割というものも考えていきたいと思ひます。今回の改訂案の81ページに、デジタル・トランスフォーメーションの推進ということが出ております。デジタル・トランスフォーメーションという言葉自体が、この計画を最初に作ったときにはなかった言葉ですので、そういった言葉が入ったことは非常に重要なことだと思ひま

す。是非これを活用していただき、若い人たちに明るい未来を見せてあげていただきたいと思います。

(寶金委員長)

ありがとうございます。これで、本日ご出席の全ての委員の方からご意見をいただきました。ありがとうございます。それぞれ拝聴して、改めてすごく熱心に議論していただいたということと、ご自身の関係以外の分野についてもいろいろと見ていただいたと感じました。ありがとうございます。

せっかくですので、それぞれのご意見に対して追加などあれば、自由に意見交換をしたいと思っています。もしもご発言がございましたら、挙手の上、お名前を名乗っていただきご発言いただくというふうをお願いいたします。皆様、いかがでしょうか。

(小林委員)

道経連の小林でございます。

(寶金委員長)

どうぞ、お願いいたします。

(小林委員)

先ほど、I Rの関係、計画部会に私も参加させていただいておりましたが、いろいろ御意見を頂戴したところであります。

それで、もちろん、私ども、I Rについては賛成でございます。理由としては、日本型のI Rというのが北海道でこそ最適に実現できるのかなど。例えば、北日本の観光拠点として、いわゆる東京、大阪のゴールデンルート以外のインバウンドを誘客できるとか、自然に恵まれている、食に恵まれている、こういった北海道に新たなウポポイとか縄文遺跡、今後、ボールパークですとかATWSの北海道開催、こういったようなプロジェクトとも連動していくということで、北海道の観光のさらなるキラコンテンツになっていけるということ。

それから、もともと北海道観光についても、いろいろな課題がありました。観光客の季節偏在とか地域の格差、そういったものがありましたので、I Rによって交流人口の拡大とか観光消費額が増加する、道内の調達、食材等含めた調達力が向上する、こういったような利点があるということで、ぜひ、計画の中に盛り込んでいただきたいということで考えております。

ただし、一方で、ご指摘のとおりカジノを中心として、I Rの社会的影響がクローズアップされておまして、I R導入に反対する道民の声があるということも事実でございます。従いまして、導入計画を進めるとともに、I Rの正しい道民の方々の理解促進を図っていくことが非常に重要なのかなどというふうに思っております。例えば、カジノ規制の内容ですとか、カジノ運業者が国や自治体に納付金とか税金を払うわけですが、これが年間200億円とも言われておりますけれども、これを財源にギャンブル依存症対策をより充実させていくことの十分な説明ですとか、そういった納付金をほかの分野へ拠出していくということ、アイディア段階でも良いので、依存症対策だけではなくて、全道の観光とか地域産業振興、社会福祉、こういったものに充当されるというような、わかりやすく具体的な丁寧な説明が必要なのかなどというふうに思っております。

さらに、I Rの機能としては、観光客を道内の各地に送客をしていくということもあります。そういったものを通じて、道内各地への経済波及効果、雇用創出が一定程度見込めるということの説明、あるいは、送客のためには生活路線も含めた二次交通の整備、こういったものが必要となってきますので、そういうことも説明していくことが重要かと思っております。

そういうことも両論併記で丁寧に説明することによって、道民の皆様方がI Rに対して正しい判断ができて、I R区域以外の道民の方もI Rが導入区域だけのものではなくて、自分の地域にも関わってくると、決して他人事ではないというご理解をいただけるのではないかというふう

考えております。以上でございます。

(寶金委員長)

ありがとうございます。IRに関する追記の意見があったかと思えます。この点でもよろしいですし、その他の点でご追加、ご発言があればお願い申し上げます。いかがでしょうか。

(寶金委員長)

では、私からも一言。まず、山本委員からの「未来への“かけ橋”に寄せて」という文章ですが、すばらしい文章で、全く修正はないのですが、この文章の名義は、この委員会の名前でよろしいでしょうか。文末には「北海道総合開発委員会」と付けさせていただくことを確認させていただきます。

全体の意見としては、皆様おっしゃっていたように、本当に、この案はすばらしいと思えました。私はこの文章は、小学生は理解できないと思うのですが、高校生なら理解できる文脈だと思えました。もちろん、巻末の用語解説など、DXなども入っていて、そういうところも含めて、文章、図示の方法がすばらしいと思えました。これをつくられた道の担当者の努力は並大抵のことではなかったのではないかと、感服いたしました。

思うことは、作った方はホッと一息なのですけれども、どうやってこれを今後道民のみなさんに浸透させるかということが難しい。大学でもこういうものをよく作るのですが、どうしても分厚くなって、精一杯削り取ってこういうものになったと思うので、これ以上スリムにはできないと思うのですが、なんとかこれを、高齢の方から若い人、多様なジェンダーを含めて浸透させる、そこまでは我々のミッションとして課されていないと認識していますが、そこは大事だと思えました。

IRに関しては、私個人の意見として、ヨーロッパを中心とするESGの観点からすると、カジノに対しては大変厳しいと思えます。IRが、カジノを含むIntegrated Resortであるならば、ひょっとすると世界の潮流の逆になるのではないかとことを危惧します。ただ、本文において、松家委員、小林委員からご発言があったように、総合計画の中で、検討の対象に値するのだという態度自体は、私はむしろ望ましいと思えます。今回の総合計画の見直しでDXが入ってきたように、IRに対する考え方も、今後変遷するのではないかと、という意味で、むしろきちんと記載するという点に関しては、私は違和感がありませんでした。私の基本的な考えは、結構厳しいのではないかと。投資側としてみると厳しいところがあるかもしれない、と感じていました。

また、細かいことを言うと、KPIが本当に達成できるのかと思えるような難しいものもごございます。出生率1.27を4年半で1.42にするという、誰が見ても無理と思えるものもあるのですが、書かざるを得なかったのだと思えますし、カーボンニュートラルの値も、2025年の値なので、2030年、そして政権が言っている2050年のカーボンゼロとどうやって結びつけるのかということも、容易ではないと思えました。細かいことを言うときりがありませんが、全体としてはよくできているというのが私の意見です。

今のことも含めて、委員の方からご意見があれば伺いたいと思えますが、いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。4回の部会で十分ご意見をいただいたと拝察いたしましたので、意見の聴取はこれで終了させていただきます。

それでは確認でございますが、2つございます。1つは、まさに本日出されました北海道総合計画の改訂案の取扱いです。もう1つが、「未来への“かけ橋”に寄せて」をどうするか。

私は今まで意見を拝聴していて、IRについては様々な意見があって、武野委員からは「賛成できない」というご意見も伺いました。また、既に部会の中でご議論いただいて、ほかの委員からの意見も拝聴し、私の意見も述べさせていただきました。この文脈の中においてこういう表現であるのは妥当ではないか、というのが多くの委員のご意見だったと思えました。

まず、本日提示されている案に関しては、概ね妥当なものであるとして決定したいと思えますが、この点、皆様よろしいでしょうか。

(委員了承)

(寶金委員長)

ありがとうございます。二点目、計画部会から提出のございました「未来への“かけ橋”に寄せて」というメッセージにつきましては、すばらしいメッセージだと思いますので、明後日に知事に答申をさせていただきますが、その際に私から知事にお渡ししたいと思います。この点も皆様よろしいでしょうか。

(委員了承)

(寶金委員長)

ありがとうございます。

それでは、ただいま決定いたしましたとおりに進めさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

続きまして、議事(2)「北海道総合計画の推進状況について」でございます。本件につきましても、事務局から説明をお願いいたします。

議題(2)「北海道総合計画の推進状況について」

(事務局・川村計画推進課長)

それでは、「北海道総合計画の推進状況」について、ご説明させていただきます。資料4をご覧ください。この資料は、毎年、計画の推進状況を委員会にご報告しているものでございますが、改訂前の総合計画の進捗を取りまとめたものとなっております。資料表紙の裏面に目次を記載しているので、そちらをご覧ください。総合計画における政策展開の基本方向である「生活・安心」、「経済・産業」、「人・地域」の3つの分野ごとに、それぞれにぶら下がる7つの「政策の柱」に基づき、推進状況を整理してございます。

具体的には、2ページをご覧ください。各ページの構成については、上段は指標について整理しており、左から順に、計画策定時点の「基準値」、令和2年8月1日時点の「実績値」、計画最終年までに目指す「目標値」、令和2年度の政策評価による指標の「進捗率」、「分析(内容)」を、一覧にし、2ページ以降、全73指標を取りまとめてございます。またページ下段は、「政策の柱」に対応する道の「関連施策」について、令和3年度の主な事業、予算額を記載してございます。詳細は後ほどご参照いただきたいと思います。概ね順調に進捗しているものの、進捗率が低い指標も見られており、また、今後は新型コロナウイルス感染症による影響も懸念されるところとなっております。

総合計画の推進状況については、以上でございます。引き続き、皆様のご指導をいただきながら、総合計画の着実かつ効果的な推進に取り組んでまいりたいと思いますので、よろしく願い申し上げます。

(寶金委員長)

ありがとうございます。ただ今の事務局からの説明に関しまして、ご質問あればお願いいたします。

よろしいでしょうか。ありがとうございます。それでは三番目の議事に移りたいと思います。「(3)その他」でございますが、あらかじめ、小林委員から情報提供の申出がございましたので、小林委員、お願いいたします。

議題(3)その他

(小林委員)

ありがとうございます。本日、私ども、北海道経済連合会の資料の説明の時間を頂戴いたしま

して誠にありがとうございます。私どもでは本年の6月、「2050北海道ビジョン～『課題解決先進地域』のフロントランナーを目指して～」という内容のものを発表いたしました。

このビジョンは、北海道が抱える諸課題を解決するとともに、SDGsの達成を通じてグローバルな課題解決にも貢献し、北海道の価値と魅力が最大限引き出されている地域社会と経済を、官民を挙げたオール北海道で創造していくという思いを込めたものでございまして、北海道の今後の開発にも、少なからず参考になるものと考えております。

詳細につきましては、私共、道経連の総括部長の柳川よりご説明を申し上げます。

(北海道経済連合会・柳川政策総括部長)

柳川と申します。よろしくお願い申し上げます。今日はこういう機会をいただきましてありがとうございます。

皆様に事前にお配りしている資料5に基づき、ご説明させていただきます。資料5の表紙でございますが、今、小林の方から申し上げましたような、私どもがこのビジョンを作るに至った背景ですとか、あるいはそこに込めた思いを記載しておりますので、後ほどご覧いただければと思います。

その後にスライド状の資料が2アップで記載されていると思いますが、画面共有しながらご説明させていただきます。まず表紙でございますけれども、タイトル、今、小林の方から申し上げたとおりでございます。

スライドの1番ですけれども、このビジョンを作るに至った経過でございます。左側の方にSociety5.0ワーキンググループの委員名簿と書いてございます。女性の経営者、若手の経営者等も含めまして、私共の会員を中心にメンバーになっていただきました。右側に経過が書いてございます。約1年かけて議論するとともに、下から3行目でございますけれども、道の関係部局、国の皆様、あるいは有識者の皆様含めまして40箇所150名の皆様に意見をいただいて作っております。

飛びましてスライドの3番でございますけれども、「課題先進地域」である北海道ということで、「広域分散型社会」、「積雪寒冷地」と、もともとある地域特性が人口減少・少子高齢化などによって、経済の縮小ですとか格差の拡大、そういった課題が負のスパイラルを起こしていくのではないかと考えてございます。そうした【望ましくない北海道】というのは、SDGsの達成や地域の存続が危ぶまれるようなものになりかねないという認識でございます。

そうならないためにということで、スライドの4番ですけれども、「望ましい北海道」、2030年、それから2050年、それぞれ地球や国や道にとって節目であるこの2つの年をターゲットに、2050年の望ましい姿、ありたい姿をイメージした上で、2030年を通過点に具体的な取組を作っていくというふうなアプローチとさせていただいております。

スライドの5番でございますけれども、ワーキンググループの委員の皆様の意見を踏まえまして、2050年の「望ましい北海道」というのはどのようなものかを示してございます。2050年の「望ましい北海道」は、先ほど申し上げたいろいろな課題が解決されているのはもちろんのこと、課題解決を超えて、飛躍的かつ持続的な発展を達成し、成長モデルの提示により世界に貢献する先進地域となっている。具体的にはローマ数字のⅠからⅢで記載してございます。「Ⅰ. 多様な魅力や価値がつながり高めあう産業・地域社会」、「Ⅱ. チャレンジ人材が活躍し、新たな価値を創造する空間」、「Ⅲ. 革新的なライフラインが支える四季を通じて快適な生活環境」となっております。2050年の北海道に暮らす人々とはということで下の部分でございますけれども、「あらゆる格差がなく、多様な人々が交流・共生し、すべての世代が、誇り・夢を持ち、生きがい等を感じて幸せな暮らしを営んでいる」、そういう北海道が望ましいのではないのかとしてございます。

スライドの6番、7番、8番につきましては、今お話ししたローマ数字のⅠからⅢ、それぞれについて説明してございます。

スライドの8番、ローマ数字のⅢの説明で言いますと、2つ目の○にございますが、積雪寒冷という元々北海道が持っているハンディやリスクも2050年にはいろいろな形で克服されてい

るべきではないか、それから3つ目の○ですけれども、先程来出てございますように2050年と言いますと、政府の脱炭素の目標の年ですが、世界に先駆けて北海道で脱炭素社会が実現している、そういう姿を描いてございます。

スライドの9番は、今申し上げたような2050年の北海道をイメージ図にしたものでございます。

スライドの10番は、そこに暮らす人々の例として、広い北海道のどこに住んでいても、快適で便利な暮らしができる、多様な人々がデジタルを介してつながっている、そういうつながりの中から新しいイノベーションが生まれたり、観光産業・食産業・一次産業といった北海道の基幹産業が更に発展している、あるいは宇宙のような新しい産業が生まれている、そういった姿を描いてございます。

ここからは第2章ということで、「2030年に向けた6つの目標」を設定いたしました。スライドの12番ですけれども、この下の方の青い枠にある目標の1、3、5。これが『安全・安心、豊かで快適な暮らし』ということで、地域社会の基盤になる部分。その基盤の上に乗りまして緑色の枠ですが、目標の2、4、6。これが『飛躍的かつ持続的な発展』、更なる価値につながるものとしており、これらが相まって、先ほど申し上げた2050年の「望ましい北海道」のローマ数字のⅠからⅢにつながっていくのではないかとさせていただいております。

スライドの13番以降では、それぞれの目標について、背景とポイント、それから下の方には、オール北海道で取り組むべき具体的な取組項目を示してございます。例えば、スライドの13番、「目標1.「デジタルを活用した連携による地域づくり」」ということでございますが、スマートコミュニティですとか、コンパクトシティ、あるいはMa a S、オンライン診療、デジタルによる社会システム基盤を支える高速通信環境、そういったものによって持続可能な地域社会が実現しているという姿を目標にしてございます。

スライドの14番は、「目標2.「北海道の強みを活かした『稼ぐ力』の向上」」ということで、ここでは北海道の元々の強みでございます農林水産・食・観光産業が更に強化されたり、ポストコロナによる「恵まれた疎(そ)」と私どもは申しておりますけれども、そういった魅力により様々な企業や産業を北海道に呼び込む、そういった目標でございます。

スライド15番「目標3.「人を育み、受け入れ、高めあう環境の拡充」」ということで、北海道を担うような多様な産業人材が内外からやってくる、あるいはデジタル人材をはじめ、北海道の中で育っていく、そういった目標を立ててございます。

スライドの16番「目標4.「北海道発未来産業の創出と道外・海外への展開」」ということで、宇宙をはじめ、新しい産業が北海道の中で芽吹いている、という目標を立ててございます。

スライドの17番「目標5.「リスクに強靱な循環・分散型社会の実現」」ということで、必要なインフラ、あるいは冬道自動走行のような冬の克服につながるような技術開発・実用化がされているというものでございます。

スライドの18番「目標6.「脱炭素社会を実現するフロントランナー」」ということで、2050年の脱炭素に向けて、2030年時点でも、再生可能なエネルギーやEV、FCV、カーボンリサイクルなどによって大きく国に貢献しているというような目標でございます。

スライドの19番ですが、「この(2050北海道)ビジョンの実現に向けた取り組み」ということで、今申し上げたようなことは当然、私ども道経連だけではできませんので、北海道様をはじめ、産学官民連携によるオール北海道で是非取り組んでいきたいというようなことを記載してございます。

スライドの21番でございますが、「この(本)ビジョンの実現による1人あたり道内実質GDPの試算」ということで、先ほど申し上げた2030年に向けた6つの目標が全て達成され、2050年に向けて更に進展したとすれば、2050年の道内実質GDPは、現在の1.1倍になるのではないかと試算しております。できるだけ人を呼び込んだりしていきますが、そうは言っても全体の人口は減ってまいりますので、人口が減る中でGDPが1.1倍になるということは、一人当たりのGDPは現在の1.3倍から1.4倍になるのではないかと、それが「2050年の望ましい北海道」の実現に寄与していくのではないかとというふうに整理してございます。

スライドの22番は、このビジョンとSDGsの関係ということで、当然、目標の1、3、5、2、4、6、いずれも2030年のSDGsに貢献すると考えてございますし、特に、目標2、4、6につきましては、『飛躍的かつ持続的な発展』ということで、ここでは私ども、「Beyond SDGs」と名付けてございますが、2050年のSDGsを超えた幸せにつながっていくのではないかとというふうに整理してございます。以降は参考資料ということで、スライドの24番から29番まで、関係するデータ等を並べてございます。

スライド30番の参考資料7でございますが、今回、ビジョンを作るに当たりまして、いろいろな方にご意見を伺ってございますが、SDGsの専門の方にもアドバイスをいただいております。そこでいただいたアドバイスとしては、先ほどご紹介した取組項目をSDGsの17のゴールではなくて、その下の169のターゲットにしっかり紐付けて取り組んでいくことが、まさにSDGsに貢献することなんだとアドバイスをいただいたものですから、例えばこのスライドの30番の目標1の①と③の取組で言いますと、SDGsの11-2、3-6、1-4、3-8等に貢献していくというようなことをスライドの30番から37番にかけて示してございます。

添付してございます最後のページには、「概要版」ということでA3の表裏で概要を示してございますので、時間のあるときにご覧いただければと思います。

私の方からは以上でございます。お時間をいただきまして、どうもありがとうございました。

(寶金委員長)

ありがとうございます。素晴らしい内容だったと思いますが、何かご質問・ご意見等あればお願いいたします。よろしいでしょうか。

これは、道経連のホームページに掲載されていることはもちろんだと思いますが、どのように広報するのか、広めるかなど議論されておりますでしょうか。

(北海道経済連合会・柳川政策総括部長)

まさにこのような場を通じて、機会をいただきましてご紹介させていただいていることもそのひとつですし、先般、山本委員がファシリテーターとなっております「北海道 Society5.0 推進セミナー」でも配付させていただいて、ご紹介もさせていただきました。あるいは当会の会員に対してもYouTubeで配信等をしています。これからも、いろいろな機会を利用し、道民の皆様、企業の皆様に発信していきたいと思っておりますし、そういう意味でも、本日、こういった機会をいただいたことはたいへんありがたいこととございます。どうもありがとうございます。

(小林委員)

道経連の小林でございますが、先ほど冒頭で申し上げましたとおり、このビジョンにつきまして、具体化していけるように、オール北海道で取り組んでいきたいと私どもは考えておりますので、ご理解・ご賛同いただいた上で、いろいろな面で連携をさせていただければと考えておりますので、是非、今後もよろしくお願い申し上げます。

(寶金委員長)

ありがとうございます。よろしいでしょうか。あまり異論はないくらい素晴らしいです。やはり実現するには、ガバナンスの問題があるのかなと思います。大学でも同じ議論をしておりますので、いろいろなところでこの議論をしているかと思えます。

いずれにしても、協力して、広報をしつつ、2030年というあと10年もありませんが、そこに向けて我々にも責任があるというふうに思いました。ありがとうございます。

それでは、全体を通じまして、委員の皆様、ご意見等ございましたらお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

ありがとうございます。以上で、皆様のご協力で本日予定しておりました議事は全て終了いたしました。大変円滑な議事・会議進行にご協力いただきまして、本当にありがとうございました。それでは、進行を事務局にお返しいたします。お願いします。

(上田計画局長)

寶金委員長をはじめ、委員の皆様、どうもありがとうございました。それでは最後になりますけれども、副知事の浦本より一言、ご挨拶申し上げたいと思います。

(浦本副知事)

北海道副知事の浦本でございます。知事に代わりまして、ひと言、御礼を申し上げたいと存じます。

本日は、寶金委員長、そして山本計画部会長をはじめ、委員の皆様には、限られた時間、そして、こうしたWebによります開催の中で、大変活発なご議論をいただき、そして多くの貴重なご意見を賜り、心より感謝を申し上げたく存じます。

加えて、ただ今、道経連様から「2050北海道ビジョン」というすばらしい情報提供をいただきましたことにつきましても、改めて感謝を申し上げたいというふうに思います。

総合計画の見直しにつきましては、本日が大きな節目となるものでございまして、委員の皆様には、約7ヶ月間という短期間で熱心にご議論を積み重ねていただきましたこと、重ねて御礼を申し上げたいと存じます。

後日、改めて本委員会からご答申をいただくという形になろうかと考えてございますけれども、道といたしましては、これまでに皆様から賜りましたご意見、そしてご提言を踏まえまして、ポストコロナを見据えた新たな北海道の進むべき道筋となるべく、成案を取りまとめてまいりたいと考えてございます。

そして本日も皆様からご意見をいただきました「道民の皆様とこの計画を共有し、そして、「めざす姿」をいかに実現していくのか」ということにつきましても、鋭意努めてまいりたいというふうに考えてございます。

結びに、寶金委員長をはじめ、委員の皆様には、引き続きのご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げまして、本日の御礼のご挨拶に代えさせていただきたいと存じます。本日は長時間に渡りまして、誠にありがとうございました。

(上田計画局長)

これもちまして、令和3年度第1回北海道総合開発委員会を閉会いたします。本日はどうもありがとうございました。

(了)